

キーワード

メディア特性、理解、低位概念、イメージ、メディアの共存

放送大学が実験番組であった頃に制作された「動物の行動」に対して行われた視聴調査で、ある学生が発言している「テキストを読んでから番組を見ると、映像が目新しい以外は、ほとんどテキストに書いてあるので、講師の話はなんとなくうわの空で聞いてしまうが、番組を先に見るとテキストを読みつつ確認ができて大変勉強になった」¹⁾。この発言から見えることは、テキストと番組は同じように作られていても、テレビ番組をテキストよりも先行させると、映像の印象やら何やらが記憶の中に残っていて、まあ学習の時間を推進する。しかしその逆は、テキストで学習がすんでしまっているのに番組を見てもしらけてしまう、と言っていることである。これはテレビが発する情報は理解を助ける土台のようなものになり得ることを示唆している。つまり印刷教材と放送教材のもつ情報の質はからずも吐露している。

また私どもが2回にわたって行った放送公開講座の調査²⁾によると、映像の多い番組は学習効果がやや落ちるといふ傾向が見えてきている。このような結果と前記の発言とを考えあわせると、放送教材は学習効果を期待してもうまくいかないのではないか（それは印刷教材に一步ゆずった方がいい）、という大変大きな課題がうかびあがってくる。

1. 放送教材と印刷教材との関係について

放送教育開発センターが進めている放送利用による大学公開講座は民放のネットワークによって行われている。そのネットワークを組んでいるのが財団法人放送教育協会で、私は凡そ10年にわたってその仕事に携わってきた。放送公開講座のディレクターの仕事ぶりについては、民放の習性として大学講座といえども視聴率を意識した面白さの追求ということがあげられる（MME 研究ノート、'87-47放送利用の大学公開講座「民間放送との関連について」井出）。その工夫として一般的に言えば、インサート映像の豊富さ、進行役や講師のアシスタントとして女性、男性アナウンサーの起用、スタジオセットのショウアップ化等があげられる。これは放送大学と違って単位取得ということがない自由さもあるかと思われる。しかしこの面白さの追求もディレクターが2、3年も担当すると、それらの工夫が必ずしも学習効果とは結びつかず、放送講座における面白さの追求の難しさに気がついてくる。その理由と克服の方向については以前に発表した（「放送と教育」映像試論・放送教育開発センター研究紀要'94-11。以下「稿Ⅰ」と表す）。放送講座の制作者会議ではよく作家・井上ひさし氏の座右の銘が引用された。即ち“難しいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことを面白く”。困難なことであるが高等教育においてもどんな形にしろメディア特性としての面白さは追求されていい。けれどもそれはどのような考え方の中にあるのだろうか。

それでは放送大学の場合はどうであろうか。日々放送されている放送大学の番組から見えてくるものは何だろうか。

10年ほど前の一ディレクターが書いている。「……実際に教育者との間で教育番組の協同作業が行なわれる時、かなり多くの印刷メディア的教育番組が生まれている現実には認めないわけにはいかない」³⁾と。

私もかつて放送大学の実験番組をつくり、現在もまた番組制作にたずさわっている。あるディレクターが、印刷メディア的教育番組が多いと書いてからほぼ10年経つが、この批評の言は現在でも通じることを認めざるをえない。何故なら、それ以後放送大学の番組づくりの技法や考え方、システム等がある進展をみせたとは思えないからであるし、私もまたそのような番組づくりをしているからである。

私が番組をつくり終っていつも感じることは次のようなことである。

- ①印刷教材と殆ど同じことをしているにすぎないのではないか
- ②しかしまあ少しは何かあるんだろう（その何かがどのように理解と結びついているのだろうか）

①に関しては、印刷教材に基づいてつくるのでどうしても構成や講師の話の内容、図表等も同じようになってしまうのは当然といえる。しかしこの印刷メディア的教育番組には重大な問題がつきまとう。これも10年以上も前のデータであるが印刷教材と放送番組の相関関係について、次のような学生（女子大生4人、大学院生1人）の意見がみられる⁴⁾。

「テキストの内容が番組の内容と全く同じである。……テキストさえ読んである程度の理解ができれば、番組は見る必要がないということにもなる」「テキストに書いてあることは、わかり易かったが、番組を見る前に読むと、ほとんど、その繰り返しになり、興味がそがれる」「いったいテキストは、放送番組のためのテキストなのか、それとも教科書として作られたものなのか」

これは当時、力の入ったいい番組として評判の高かった「動物の行動」に対する意見である。よくできた番組でも、印刷教材との関係においては大きな問題を露呈している。そして10年余経った今、事態は変わっただろうか。

②に関しては現状肯定としての感慨である。実際にこのような肯定型の意見は統計調査によっても大変多い。

例えば'95年の放送大学生を対象にした調査では、テレビメディアの特性が活かされている、72.6%（全体）となっている（放送大学視聴状況調査・ビデオリサーチ）。

また他の調査では次のようになっている。

1) 放送授業はメディア（TV・ラジオ）の特性がよく活かされている（全体）	2) 放送授業は印刷教材に忠実に従って進めて欲しい（全体）
1. そう思う 43.2%	1. そう思う 16.6%
2. ややそう思う 41.4	2. ややそう思う 20.8
3. あまりそう思わない 11.9	3. あまりそう思わない 40.3
4. そう思わない 3.5	4. そう思わない 20.3

（'87 放送大学学生の意識についての調査 放送教育開発センター研究報告）

印刷教材と放送教材をきりはなして各々の評価を問えば、現状肯定型の答えが多くなるのは当然といえる。放送大学生はその是非を問われても比較検討できるものを持っていな

いからである。従って楽観できるデータではない。

放送授業は印刷教材に忠実に従って欲しい一で、あまりそう思わない、そう思わない、を合わせると60.6%という多数の人が“違っていい”と答えていることになる。また1)と2)の回答の間にもどのような相関があるかも今後の調査をまたねばならない。

いずれにせよ現行のテレビ番組は印刷教材との関係において、どのような番組が作られたらよいかの調査研究は殆どなされていない現状といえる。そしてくり返すが印刷教材との関係において、番組づくりの技法や放送大学のシステムがこの10年ほどである進展を見せたとはとても思えないのである。ということは10年前に表現された印刷メディア的教育番組という評はいまだに大きな力を持っていることであり、この問題について考えてみる価値は十分にある。そしてこの問題は、いつも映像と理解というメディアの問題につきあたる。

2. 映像メディアと理解の問題について

映像と理解の問題を考えるために、私は稿Iで次のような表を提示した。

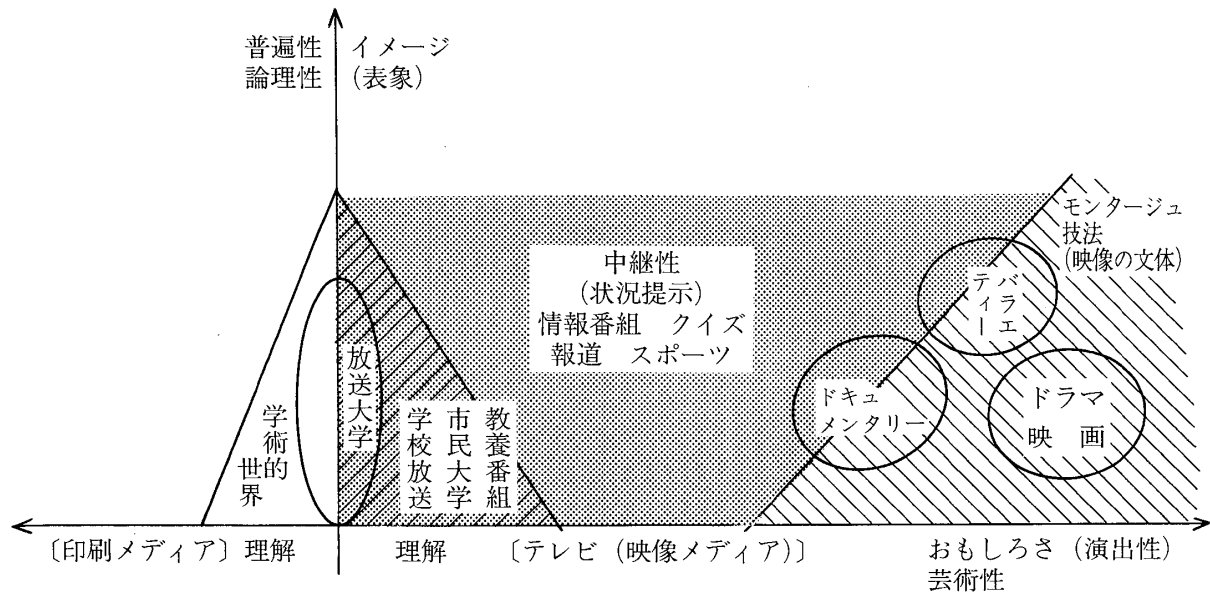
表I 文字と映像の情報構造

文字による情報構造 (学術的世界)	映像による情報構造 (映像の文体)
論理的 定量的 明快な表現 分析的 一義的な解釈	感性的 情動的 情緒的 定性的 曖昧な表現 直感的 多義的な解釈 (モンタージュ) 状況提示 (中継性)
体系的 (内容 文体) 理解を前提としている	非体系的 (価値 文体) 理解を前提としていない 組合せによって劇的な映像言語 を生む

今回はこの問題を更に別の角度から眺めてみたい。

図1はメディア特性という指標を通して、概念的に放送大学の番組の位置づけを行なったものである。この図をもとにして現在のテレビ番組を情報構造という点で大まかにまとめてみる。

A) 面白さー右へ：ドラマや映画、バラエティーなどが相当する。稿Iでも述べたように、扱われる価値は愛や勇気、笑い、怒り等、学校教育体系に乗りにくい価値であり、しかし人間の基層部分におけるすばらしい栄養分である。いわば感じとって行く情感的な何事かを提示する。モンタージュ (クローズアップやロングショットなどの技法を用いて映像のある意味をつくり出してゆく手法。或いはその意味を読み取れるようにつないでゆく手法。映像情報には体系的な意味などないので、逆にこの手法が劇的なイメージを生む効



図I 映像メディアにおける放送大学の位置

果を持つ) という映像の文体が一番活かせる分野である。もちろん体系的な理解などはねらいとしないし、理解ということでは芸術性の高い絵画や写真などはむしろそれを拒否さえする。但しモンタージュなどという技法や言葉は現在のソフト制作者はあまり意識しなくなったし、そういう手法を無視した面白い番組もつくられている。しかし、モンタージュにかわる映像文体の理論はまだ打ち出されていないように思われる。

ドキュメンタリー番組は、民放ではいま殆どなくなってしまったが映像手法的にはモンタージュと中継性にまたがる特殊な位置をしめる。

B) 電波性を利用—中間位置：電波のもつ中継性(状況提示)を利用した番組で、従来の報道やスポーツ番組、ある時期から民放・NHKを通じてぐんと伸びてきた情報番組(ワイドショー、自然、歴史、紀行番組)、クイズ番組等がこれに相当しよう。モンタージュ手法も利用される。しかしこれらの番組も「理解」などをねらっているわけではない。

A・Bとも、編成段階からテレビに乗るものとして企画され、民放各社・NHKともシノギをけずっている分野である。

C) 理解をねらいとした最左翼：教養番組、学校放送、市民大学そして放送公開講座、放送大学など理解をねらいとした番組群である。映像手法としては一般的にモンタージュは成り立たず、カメラが捉える中継性や状況提示のみが力を発揮する。理解ということの要求度で強弱があるが体系的な理解という意味で放送大学の番組は最左翼にある。

現在放送されているテレビ番組についていえば、その扱う内容や価値の多様化、映像技術の高度化により、どの手法どの分野などといえない番組が沢山あるが、ここにひとまず分類した図1からは放送大学の番組が映像メディアとして大変特殊な位置にあることがわかっていただければ十分である。その特殊な位置とは、理解を前提とすると映像のパワーは落ちるということである。その落ちた分、表現の文体と内容は印刷教材の特性に近づくということである。メディアの情報はメディア自体の制約をうけるということが最も顕著

にあらわれる位置ということを示している。


講師もディレクターも理解を前提とする強い目的を負って印刷メディアと紙一重のところにいる。二つのメディアは表1に示したように情報構造としては往々にして相反するベクトルを持っている。しかし実際の番組づくりは講師の書かれた印刷教材をもとに、紙一重のメディアの壁を簡単に越えて殆どそれを中継するような形となっている。それは印刷メディア的教育番組として印刷教材の内容を伝えてはいるが、メディアの共存という点で大きな問題をかかえることとなった。私が稿Iでわが国の放送大学は難しい形式を選んだ、と書いたのはこのことである。放送教育開発センターの多田前教授が、このかかえている問題について次のように書いておられる。「諸外国の遠隔高等教育における主要な教授メディアは、殆ど例外なく印刷された教材である。この場合、学習は印刷教材をベースに進められ、放送教材（テレビ、ラジオ、オーディオ・ビデオカセット等）は補完的な役割をふられる。イギリス公開大学における印刷教材、放送教材のそれぞれの位置づけはその適例であり、後者の役割は学習者に対する動機づけ、学習のペースメーカーといった程度に限定されている。そして、位置づけが限定されているので、かえって果たすべき機能が明確に整理・分類されているともいえる。……これに対してわが国放送大学の場合は、「放送」大学という）建前上も、現実の学習形態上も、放送の占めるウェイトがきわめて大きく（放送授業において印刷教材と放送教材とは均等にウェイトづけられる）、諸外国の例にみられるような印刷メディアを基本とする教材制作の枠組み（印刷→主、放送→従）をとりにくい。両種教材が均等にウェイトづけられていることが、かえって両者の相互関係・役割分担を難しくしているとさえいえる。」⁵⁾

また、この研究報告書には次のような引用もあり、ある覚悟を問うている。「もともと放送大学において印刷教材を活用することはディレンマを含む。一方で、もし印刷教材が放送教材の補完としてでなく研究され充実するならば、放送教材は補完的教材となり、莫大な先行投資を経て成立した放送教育の経験の価値が減じられる。だから、この選択肢は歴史的経緯が許さない。他方、もし放送教材が主たる教授メディアとして現在のように利用されていくならば、原理的に音声メディアや映像メディアによる高等教育が可能なのかどうか、また従来の印刷メディアに比べどのような価値をもっているのか、などの疑問に答えられるものでなければならない。しかし、これへの回答には質の高い研究や実験の継続を待たなければならない。」（白石克巳「遠隔高等教育における印刷メディアの意義」1989、原文は長谷川仏教文化研究所研究年報、第16号）。

わが国の放送大学は放送局を持つ大学として世界でも大変めぐまれた位置にある。放送教材、印刷教材、その両者の関係や在り方も、メディアの共存という意味で現行のまま固定化して行くことは非常に問題が多いことはいままで見てきた。映像は言葉よりも広がりを持つ。その広がりを利用した不断の試みがなされていていいと考える。その意味で、メディアと高等教育について世界のリードをとり得る立場に立っているとさえ言えよう。

3. メディア各々の学習の線をつくるために

体系的な理解を前提とすると映像のパワーは落ちる。これは放送大学の関係者が肝に銘ずべきことである。従って映像のパワーをとりもどしながら番組づくりをするためには印刷教材とは理解の着地点を変える必要がある。私はメディア特性と番組づくり（理解の着地点）ということに関して次のように考えるものである。以下、日々体系的蓄積を増している自然科学系の放送教材などを念頭において考えてみたい。

A  印刷教材 くり返すまでもないが、メディアのもつ情報構造がメディア自体の制約をうけることは表1からも明らかである。とすればメディアによって理解への論理や質も違うということである。このことは印刷教材と同じようにやっても同じように伝わるわけではないし、同じように理解されるわけでもない、ということでもある。メディアの特性ということを考えれば当然それぞれの着地点が違っていい。従って、テレビでは理解につながる別のもう一本の線考えた方がいい。

即ち15回なら15回の印刷教材を読んだ時には一本の理解の線ができ、15回の放送教材を見た時には別のもう一本の線ができ、この2本の線が、時には衝突もし時には掛算や足し算となっていない交ざり理解へのアンサンブルをつくってゆくという図式(A)である。メディア特性による学習の再構築とはこのことである。

それでは放送教材によるもう一本の線とはどのような線であろうか。それは印刷教材の内容の理解を助ける土台づくりであると考えられることである。言い換えれば低位概念の線ということである。ここでいう土台、低位概念というのは映像メディアの持つ情報構造によって作り出されるイメージや基層的概念(稿I参照)、或いは定性的な取扱いのことであるが、メディア特性の位置づけとして誤解をおそれず使用したい。この低位ということが大事であって、映像教材の理解の線は印刷教材よりも低位であることによって初めてメディア特性としての力と質をもった太い線になるということである。メディアの発するメッセージはメディア自体の制約をうける⁹⁾、ということはこのことであり、高等教育における映像メディアの制約は内容を上げることに厳しく作用する。

私は図1で映像メディアの理解の線の向かう(Y軸)方向をイメージとか表象(リアリティ)においた。それはイメージという認識構造が、現在の学術的レベルを保つ論理的で高度な印刷教材の内容を理解へと運んで行くいい道具であると考えられるからである。この道具は定性的で下位概念ほど映像の参加が容易になり映像的な広がりと力を発揮できる(定性的な扱いほどイメージは豊富となるが、一方学術的には問題も多いアナロジーを生みやすい。しかしそのために印刷教材もあり、学習指導もあって一つの理解に達して行くと考えたい)。

高等教育の番組では個々のシーンでモンタージュという手法は不成立であるが、番組としての構成手法という意味では成立する。そのいい事例として私は稿Iで放送公開講座の

「脳浮腫と頭蓋内圧亢進」その第5回「脳の発生とその障害」（'88年度 新潟大学—新潟放送、この年度のコンクール最優秀作品）をとりあげた。この作品の特徴的なことは脳のある病理現象における自然治癒力による修復過程を実証的に追いながら、最後に信濃川の流れが映し出されて終ることである。そしてそれはこのようなナレーションで終る。「実は病理的な脳浮腫の中では胎児脳や単細胞生物の発生と同じような仕組みが行われている。」

脳浮腫と信濃川の流れ—それは大変感動的な印象を残して終る。これは番組全体の構成手法としてとられたモンタージュであって、一つの劇的な効果、掛算的な意味をつくり出す映像手法である。そしてこのような手法がイメージというある定性的な土台づくりとして成功したものと考えられる。それは理解というものを運んで行くいい道具もしくは機関車としての役目を十分にはたした。私が低位概念の映像づくりが映像パワーを発揮するというのはこのようなことである。映像は映像的な論理構造の中で組み立てられて初めてその力を発揮する。

印刷教材は学術レベルを保って高位につける。しかし放送教材は着地点、到達点を低位、土台としての位置に保つ。こうすれば放送大学としての独自の理解の線が演出できると思われるし、理解をねらいとした映像文体の開発も可能となつてこよう。それは放送を重視する放送大学の行き方とは何ら矛盾しない。

私は稿Iでは映像がもつ感性的な流れを通奏低音として、その上に学術的定量的な情報に乗せて行く演出法を提示したが、これは印刷メディア、映像メディアの二つの特性をなんとか一本の番組の中で共存させようとした考え方である。しかしこのような番組づくりは講師にもディレクターにも大変な力業（ちからわざ）が要求される。実際に、このような図式を学ばせていただいた前記のコンクール最優秀作品は、制作上の時間だけでもリハーサルに2日間をかけたと聞いた。今まで述べた2本の線をつくる考え方は、この通奏低音としての映像機能的な線と学術的な印刷教材としての線をメディアの共存線として、それを実現して行くためのシステムとして分けてみた考え方である。

また前述した放送公開講座の制作者の間からは印刷教材とは違った番組の活性化や着地点の視点として、次のようなことがあげられてきた。

- ・ x を設定し追って行く構成（犯人探し）
- ・ 歴史的な視点を常にもつ
 （過去において放送大学でも次のような学生の発言がある。「基礎化学I」に対して「このテレビ講座が素晴らしいと思ったのは、毎回のテーマが歴史的にどのような道筋を通して現在に至ったかを説明していることである。これは非常に重要なことであるし、視聴者にとって興味深いものである。」⁷⁾
- ・ 印刷教材の中の一行を捉え、それを拡大して一本の番組とする。例えば制限酵素（遺伝子を切るハサミ）の発見は素晴らしい、とあったら全体的なDNAの説明は印刷教材にゆずり、その素晴らしさを番組とする。
- ・ 何故か、何故そういうことがわかったのか、といった過程をもっととりあげる。或いはそのドキュメント（例：水辺に棲む野鳥ヨシキリの行動範囲を調べるにはどう

したらいいか、等)。

このような視点はテレビによる高等教育の中にリアリティをもちこむという意味で大変大事なことである。学問の表現にもっとリアリティをもちこむ——このようなことも2本の線を考えることによって可能となってくる。

2本の線を考える。それは教育の方法として様々な可能性をもつ。メディア特性による学習の再構築とはこのことである。

テレビはテレビで15回による1本の線をつくる。下表は今年度制作の「生物有機化学」を例に、いままで述べた考え方を基にしてテレビとしてのもう1本の線をつくってみたものである。主任講師のアイデアを借りてあえて私が考えた1案として提示した。

表II 生物有機化学 (平成7年度制作)

印刷教材の各章タイトル	放送教材の私案タイトル (ねらい)
1 生体物質の化学	1 生命—分子でできた機械
2 酵素とは何か—生合成と機能	2 分子—結合、開裂の条件 (親水性、疎水性など)
3 酵素の利用	3 生体触媒・酵素—その発見と化学史
4 分子を見分ける(1)—ホストとゲスト	4 酵素反応の速さを調べる (反応式はどのように考えられたか)
5 分子を見分ける(2)—人工酵素	5 酵素の利用—1滴の血液から
6 分子を見分ける(3)—分子認識の応用	6 分子を見分ける—究明の方法と実験
7 核酸のヒミツ(1)—核酸の構造とダイナミクス	7 分子をデザインする (分子認識の応用)
8 核酸のヒミツ(2)—核酸の機能とリボザイム	8 核酸の化学史
9 生体膜とは	9 分子プリント—複製・転写・翻訳
10 生体膜をまねる(1)—人工脂質2分子膜	10 生命のしくみとリボザイム—それはどのように究明されたか
11 生体膜をまねる(2)—人工膜材料への展開	11 生体膜とは—血球の膜を調べる
12 リズムに生物らしさを見る	12 生体膜をまねる
13 情報の流れから生命を捉える	13 生物らしさを考える—分子現象から
14 エネルギーを変換する	14 生物らしさを考える—感覚をまねる
15 モノを感じる	15 細胞—分子と生命機械

この場合は現行の印刷教材を学術的な基準にして、もう1本の線としての番組づくりを考えてみたものである。

しかし逆に、現行の印刷教材をテレビ番組制作のためのテキストと考え、教科書は別につくるという考え方もできる。この場合にはテキストは番組のための原稿でいいわけであるからもっとずっと簡単な、早くいえばメモ風のものでよく、あとは出演する講師とディレクターと一緒に番組内容を考えてゆく。但し印刷教材としての教科書は、もっと独習型の教科書として別に展開するということになる。メディア特性を考えることはメディアの

B ■■■■■ 印刷教材 共存性を深めることである。体系的な理解の主体はなんと
■■■■■ 放送教材 いても印刷教材にある。それは表1の情報構造が示す通

りである。印刷教材のあり方も放送大学としてはもっと独自の方向をとっていいわけである。この場合は2本のイメージ線としてはBのようになる。



いずれにせよ、A・B型とも2本の学習の線を実現して行くためには、放送大学の企画から制作システムまで根本的な見直しが必要となる。例えば、印刷教材をつくる先生と、放送教材をつくる先生とは別にするとといったことも必要になってこよう。また、45分×15回という編成時間も再検討されなければならないし、現行のようにテレビの内容が印刷教材の一章一章に対応していなくてもいいわけである。

10年前にも前記論文中で野沢助教授が書いている「特に印刷メディアは抽象性や専門性の高いもの、じっくり検討したい内容のものを盛り込むのに最適なメディアである。あるいはまた個人の質問に person to person で答えてくれる面接授業は、難しい内容を理解に導く貴重な方法である。

こうしたメディアや方法がありながら、何故にすべてをテレビに盛り込まなければならないのか。

それぞれのメディアや方法が、最も得意とする分野で役割分担をする、そしてそれらを有機的に組み合わせる——平凡だがこれが結論ではないだろうか。ここには何の無理もないのである」。

それでは現在の印刷・放送教材は線として考えるとどのように描けるだろうか。おそらくCのような2本線であろう。高度な内容の印刷教材を土台にして殆ど中継性だけが頼り

C  印刷教材 のソフトづくりである。表1、図1で左辺に右辺を乗せて  放送教材 行く番組づくりである。現場取材のビデオ映像などが多少のメディア的な内容をつけ加えているいわゆる相互補完的な考え方であるが、二本の線ははっきりと描かれない存在としてある。このような教育番組が印刷教材とあいまって、どのような理解をおし進めているのかはこれからの調査をまたねばならないが、テレビが低位のメディア特性であるという視点からみると映像の文体（パワー）が発揮できない多くの問題をかかえている。特にわが国のように放送を重視した行き方をとる時、映像メディアによる高等教育の理解とその可能性については、もっと実験的な試みやデータが積み重ねられる必要がある。

1984年、放送教育開発センターで同じ講師が同じ内容を6つのパターンで講義し、それを比較検討するというシンポジウムが開かれた⁸⁾。その中で一番評価が高かったのは講師が顔を出さないオール映像、音声はナレーターによるオールナレーションという形式のものであった。しかしこの形式には会場の大学の先生から、これが学問か？という質問が投げられた。その時会場にいた私もこの疑問に与したものであるが、今は私はむしろこのような番組づくりに形式は別にして肯定的である。何故なら、くり返すがメディア特性を考えると、映像メディアによる高等教育は低位の理解をねらわざるをえず、それによって質を考えて行けばいいのだと考えるからである。

放送大学による高等教育は放送教材だけでは成り立たない。上記の実験パターンも放送

教材だけで考えると、これが学問であるか？の質問はまあ肯定できるが、印刷教材との比較共存を考えると強く否定はできない。これもくり返すが、映像は言葉よりは広がりをもっている。イメージは言葉よりも根源的である。その広がりや根源的な方向が体系的な論理の方向に向かっているわけではないが、さしあたってメディアの各々のよさをとり込んで行くしかない。

そのためには、放送大学の番組が受講生の理解にどのように役立っているのか、という調査研究がもっと深められるべきであろう。稿Iであげた映像言語の研究とはこのことである。もちろんその調査方法も含めて大きな困難をとまなうことは本文中で引用した白石氏の指摘の通りである。しかしこのような研究が進められないならば、映像のもつ情報の質にも論理的な根拠が与えられないであろう。

私は図1のことには多くふれなかった。一般のテレビ番組は、その表現の形式、内容ともあらゆることが試みられて進んでいる。モニタージュも含めあらゆる映像の文体手法が応用されている。しかし高等教育の分野、即ち理解を前提とする教育分野ではこれらの手法の応用がきかない。その意味ではテレビの世界で最後に残された映像文体の未開拓地である。その文体も、前記の、映像によってどう理解がおしすすめられているか、の研究が進められれば、文体（演出）の方法も見えてくる。そしてそれは大学のメディア利用にも一つの理論的な根拠を与えるものとなろう。

<注>

- 1) 「送りてと受けての声ー番組改善研究II」MME研究ノート'84-9、放送教育開発センター
- 2) 「放送利用の大学公開講座実施報告書」'92年度「'89、'90年度TVモニター調査から」井出定利、天野弘三：放送教育開発センター
「テレビ大学放送公開講座における番組作品評価の試み」今津孝次郎、井出定利、清水俊朗：放送教育開発センター研究紀要、第10号-1994年
- 3) 野沢卓式「ビデオテープ・レコーダーの調査とその考察」MME研究ノート、'86-26：放送教育開発センター
- 4) 前掲「送りてと受けての声ー番組改善研究II」
- 5) 「印刷教材・放送教材の相互補完に関する研究開発」研究報告、'91-32：放送教育開発センター
- 6) 「コミュニケーションの形式は内容を変えるだけでなく、それぞれの形式はまた特定の種類のメッセージに適している。内容はいつもなんらかの形式のなかに存在し、したがってある程度までその形式の力学によって支配される。……人びとに伝えられるものはいつも“形式のなかに内容”である。この意味で、メディアは共同メッセージである。」マクルーハン、カーペンター「マクルーハン理論ーメディアの理解」P 6、サイマル出版会
- 7) 前掲「送りてと受けての声」
- 8) 「映像表現の多様性ーシンポジウムの記録」MME研究ノート、'84-6